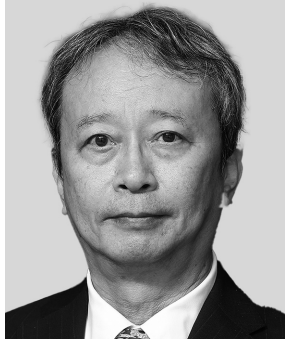
◇経済倶楽部講演会第4552回（10月3日）

イスラエルの対イラン攻撃を通して見る中東情勢

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科教授　田中（たなか） 浩一郎（こういちろう）

＊中東不安定の種をまくイラン、イスラエル、アメリカ
＊ネタニヤフ首相の最終目標はハマスせん滅
＊国際法を違反、右傾化激しいイスラエル社会
＊圧倒的な軍事力を外に向けるイスラエル
＊対イラン先制攻撃の2つの目的
＊イランの核施設が検証不能に
＊制御の効かないイスラエル
＊サウジアラビアとパキスタンが協定を締結
＊国際社会で加速する反イスラエルの動き
＊イラン最高指導者の後継者選びは振り出しに



山縣　それでは開会いたします。（拍手）

本日は慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科の教授でいらっしゃいます田中浩一郎先生をお迎えいたしました。

田中先生は東京外国語大学のペルシア語学科を卒業された後、日本エネルギー経済研究所常務理事兼中東研究センター長をお務めになって、慶應義塾大学に転じていらっしゃいます。イランを中心としました中東地域の国際関係については日本の第一人者でいらっしゃいます。6月、イランがイスラエルによる爆撃を受け、その後、アメリカがバンカーバスター爆弾を落とす展開になり、中東情勢は大きな一線を越えたといってよいでしょう。その後、イスラエルはイスラエルとハマスの仲介国であるカタールを爆撃し、米仏独がいわゆる核合意についてうまくイランと折り合えずに、9月27日には国連の制裁が復活するということがありました。トランプ大統領がガザ地区の和平提案を29日にしてハマスの回答を待っている段階に来ておりますけれども、様子がまだわからない状態であります。

このように様々なことが次々に展開していて、非常に緊迫した情勢が続いております。今日は先生にその辺の分析、展望をお伺いしたいと思います。

では先生、よろしくお願いいたします。（拍手）

田中　ただいまご紹介いただきました田中と申します。よろしくお願いいたします。

今ご紹介の中で触れていただいたように、イ